

Title	北方舞踏派・鈴蘭党研究(2) : 舞踏家鈴木美紀子に聞く
Sub Title	A study of Suzuran-toh and Hoppo-butoh-ha (2) : a dialogue with butoh dancer Suzuki Mikiko
Author	小菅, 隼人(Kosuge, Hayato)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.37 (2022.) ,p.175- 203
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20220630-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

北方舞踏派・鈴蘭党研究（2）

——舞踏家鈴木美紀子に聞く——

小 菅 隼 人

はじめに

鈴木美紀子は1970年代に北方舞踏派、および、鈴蘭党に舞踏手として所属した。鈴木は、1955（昭和30）年4月9日札幌市で、牛乳配送を生業とする家に、三人姉妹の末子として生まれた。家族全員で家業を手伝うほどのとした風景が想像できる。しかし、鈴木は、中学、高校時代、現代の言葉でいえば「いじめ」あるいは男子生徒からのいわれなき暴力を経験し、つらい日常を送ったことが、『鈴蘭党写真集—舞い舞い Love：闇する白き舞姫たち』（たざわ書房、昭和56年）の文章から窺える。鈴木は次のように記している：「私を怯えさせたのは、彼らではなく、何もできない自分と、当たり前のようにそれが起こり続けたことだった。そしてそういうことが私の内に残っただけだった。彼らには、まったく何の意図もなかったのだ。そしていまさらのように思い出すが、子供のころは陰気だった。私は絵を描いている時だけ楽しかった」（70頁）。おそらく、そのような日々が続いた10代から20代において、北方舞踏派との出会いは、鈴木にとって1つの「救い」になったのかもしれない。北方舞踏派に入った時のことを鈴木は「稽古場は、シンと静まりかえっていて、かえって私の気持ちをたかぶらせた。まったく新しい世界での未知なるものへの不安と期待があった。そして、その時の後頭部を、何か、かたいもので強打された後の痺れたような感覚は、実は今でも続いているのだ…」（72頁）と記している。

本文でも述べたが、舞踏は、1960年代から70年代にかけて、何らかの間

題意識をもった若者たちが、何かを求めて飛び込んでいく場所だった。すでに踊りの訓練を受けた者もいたが、大抵は、舞台経験のない者たちだった。その意味では、伝統芸能やバレエとは全く異なり、舞踏との出会いは、あるいは絶望し、あるいは迷走しつつ、意識的に何かを求めていた若者たちの「救済」あるいは「復活」の機会になった面があると筆者は考えている。特に、鈴木美紀子や長谷川希誉子のように、土方巽や大野一雄との決定的な出会いや薫陶があったわけではなく、いくつかの地方公演に触れ、チラシやポスターを見て、合宿に参加するところから舞踏を始めた舞踏家にとって、舞踏は彼女たちの生き方そのものであり、その意味では、彼女たちの内面と「人となり」こそが、彼女たちの舞踏表現であった。そして、殆ど例外なく、この時代の女性舞踏手たちは、キャバレーやショーへの出演を経験している。鈴木の話によると、むしろ、時間的な長さから言えば、その方がメインで、舞踏公演以上に人生に及ぼした経験としての印象は強いようにさえ思える。1970年代に成立した女性舞踏集団「鈴蘭党」および「北方舞踏派」に関わった舞踏家の直接証言は、舞踏草創期のダンサーたちの生き方と、舞踏の根底にあるものを知る上で基礎資料となるはずである。

舞踏に入るまで：幼少時代

小菅隼人（以下「小菅」）：1974年にビショップ山田を中心とした舞踏集団が、東京を離れ、山形県鶴岡市を拠点に「北方舞踏派」として活動を始めました。その後、1976年に北海道小樽へ渡り海猫屋などを中心に舞踏活動を続けます。東京、鶴岡、北海道とそれぞれの地で加わったメンバーと共に、女性だけの舞踏集団である「鈴蘭党」が雪雄子をリーダーとして、三浦明美、鈴木美紀子、佐々木智枝、長谷川希誉子、そして早くして亡くなった熊谷日和によって結成されました。女性だけの舞踏集団は、「アリアドネの會」はありましたが、舞踏の草創期にあっては、珍しいことだったと思います。そのメンバーであった鈴木美紀子さんにお話を伺いたいと思います。鈴木さんのことは、ビショップ山田さんが「鈴蘭党の中で一番

尖っていた」と言っていましたよ (笑)。

鈴木美紀子 (以下「鈴木」): そうですね (笑)。今は昔ですけど。

小菅: 西洋演劇史や現代演劇を見ていても、あるいは歌舞伎や能など古典演劇を見ていても、演劇に入るには2つのパターンがあるように思います。まず1つは、親が演劇関係者だったり、演劇を生業とする家に生まれたり、というものです。地方を巡業する大衆芸能、歌舞伎や能は典型的ですよ。物心をつかない3歳や5歳くらいから踊りを始めて、そして演劇界に入って芸道を極めるといようなタイプの俳優たちです。こういう方々は、当然のことながら、演劇を「運命」として感じ、家業として意識しています。もう1つは、演劇に全く関係ない人生を歩みながら、ある時期、啓示を受けたように演劇界に入っていくタイプです。戦前、戦後直後の新劇や1960年代のアンダーグラウンド演劇などにそういう方は多かったと思います。踊りにしても、例えばバレエや日本舞踊のように、本当に小さいうちから師匠に叱責され、時には叩かれながら訓練を積み重ねていくダンサーがいる一方、もう1つのタイプとして、特に舞踏は、鈴木美紀子さんがそうであるように、ある時期に、舞踏公演を見て、自分もやってみたいと決心をして、何かの舞踏集団と関わることでその世界に入っていく方々が多いように思います。その意味では、舞踏研究はダンサーの「人となり」が一番大事じゃないかと思います。どういう人生を送ってきて舞踏に入って、そして舞踏界の中でどういう舞踏人生を送って、またある時期で辞めたのであれば、それからどういう人生を送ったのかという点、言わば舞踏家の人間論を伺いたいと思います。まず、幼少時代から伺わせていただきます。お宅はどんなご職業だったのですか？

鈴木: 牛乳屋だったんです。雪印とかの牛乳を配達していたんですよ、いろんな家の前に。冬なんかソリでやっていましたね。

小菅：札幌市内ですか？

鈴木：札幌市内です。当時でもソリを使っているのはうちの父くらいで。みんなトラックとかでやっているんですけど。昭和30年くらいです。

小菅：今はどなたかが家業のご職業を継いでいますか？

鈴木：いえいえ。もう女ばかりだったので、それぞれお嫁に行ったりバラバラですね。

小菅：なるほど。それで、ご家族が手伝われて一家で営んでいたのですね？

鈴木：そうですね。子供の頃は私たちも手伝いました。小さな袋に牛乳瓶を何本か入れて雪の中、歩いて行ける所を配達したりしていました。

小菅：それでは、育ちとしては冬の寒さとか雪とかには随分慣れていらっしやるのですね。

鈴木：そうかもしれないですね。寒さには強いですね。

小菅：それで、高校まで札幌ですか？

鈴木：ええ。

小菅：どんな少女時代だったのですか？ 部活とか興味のあったものとか…。

鈴木：中学時代が一番まともだったかな（笑）。小学生時代は、体付きが女の子の方が大きいじゃないですか。暴力女でした（笑）。男の子とも取っ組み合いの喧嘩したりとか。中学生になってから卓球部に入って3年間、一番まともだったかもしれないですね。

小菅：では、体を動かすのが好きだったわけですね。

鈴木：そうですかね。体を動かすのが好きだと自覚したのは、舞踏をやってからですね。

小菅：高校は？

鈴木：啓北商業高等学校です。男女共学なんですけど、女性のほうが圧倒的に数が多くて、男女クラスと女子クラスになっていましたね。でも途中で辞めちゃうんですけどね。

小菅：どうして中退されたのですか？

鈴木：簿記とかは私がこれから生きていくうえで必要ないと思ったんですね（笑）。今は好きで、かつて事務の仕事なんかもやったりしていましたが、当時はこんな面白くないことをやっているのはもったいないと辞めました。

小菅：そうですか、それでは、そもそもどうしてその商業高校に行かれたのですか？

鈴木：そこしか入れなかったから（笑）。

小菅：何年の時に辞めたのですか？

鈴木：3年になってから辞めたんです。

小菅：もったいないというか…。

鈴木：みんなに引き留められて、でも「いやだ」と。

小菅：高校時代は部活はやられていたのですか？

鈴木：1年の頃、映画研究同好会を作ったりしていましたね。

小菅：その頃の映画はどのようなものでしたか？

鈴木：日本映画はあんまり見ていない。海外の映画ですね。ヨーロッパやらアメリカやら。『真夜中のカーボーイ』（1969）とか。

小菅：1955年生まれで高校時代というと、ちょうど学生運動の時期ですね？

鈴木：学生運動が下火になってきた頃ですね。私たちは「しらけ世代」で、5つくらい上が一番学生運動とかやってたんじゃないかしら。

小菅：私は1962年の生まれで今年60歳なのですが、私たちは「新人類」と言われた世代です。鈴木さんは、いわゆる団塊の世代ですか？

鈴木：団塊の後です。

小菅：鈴木さんは政治とかには…。

鈴木：まったく関心がありませんでした。

舞踏に入るまで：社会人として

小菅：高校を辞められて、それからはどうしたのですか？

鈴木：カメラをやりたかったんですね。なんでそうなったのかわからないんですけど、カメラの内部を知りたいと思って（笑）、カメラの修理をやっている小さな会社に入って、分解、清掃したりして。

小菅：当時の女の子としては珍しかったかもしれませんね？

鈴木：そうですね。私1人でしたね。珍しがられました。

小菅：その当時はステレオタイプというのがありましたからね。女の子は機械に弱いとか。今振り返ってみると、とんでもない間違いだと思います。それは札幌市内ですか？

鈴木：そうです。でも1年ももたなかったんじゃないかしら。

小菅：その後は？

鈴木：カメラやりたいということで、写真館というか出張撮影なんかもしているような所でアシスタントのようなことを。将来的にはちゃんとカメラ持たせてやるからという約束で入ったんですけど、2年くらい勤めても全然カメラに触らせてもらえなくて（笑）。結局入ってみたら葬儀の写真が主で、遺影を作るわけですね。突然のことですから普通の写真でバック

にいろいろと写っているんですが、バックをエアブラシで消して喪服を着ているように着せ替えみたいにして、そんなことをやっていましたね。

小菅：それがだいたい20歳過ぎくらいの時ですね？

鈴木：そうですね。ハタチ前後で、成人式の日、仕事していましたね。みんなの振袖を写すほうの。

小菅：舞踏にはまだ出会っていないのですね。

鈴木：踊りの「お」の字も興味がないっていうか、できない。あんなもの小さい頃から訓練してやるもので、私には全然関係ない世界でしたね。

舞踏との出会い

小菅：それで舞踏はいつ最初に見られたのですか？

鈴木：あの頃はいろいろ札幌に、笠井勲さんですとか田中泯さんですとか、『陽物神譚』とか『男肉物語』とかがフィルムでどんどん来て、それを立て続けに見た後、たまたま北方舞踏派の合宿のチラシを目にして。それがダリか何かの絵を使ってすごくかっこよかったんですよ。ちょっと行ってみようかなと思ったのがきっかけなんです。

小菅：それまで実際に舞台上で舞踏を見たことはなかったのですか？

鈴木：舞台上で見たのは笠井勲さんと田中泯さんです。

小菅：笠井さんの舞台って何だったか覚えていますか？

鈴木：覚えてないです。笠井叡さんの踊りはあまりびっくりしなかったんですけど、田中泯さんは当時全裸で体中の毛を剃って、大事な所だけ包帯でぐるぐる巻いて。それは、「そこまでやるか、この人」という感じでびっくりしましたけどね。

小菅：お二人ともとても若い時代ですね。それでは、笠井さんや田中さんの踊りや大駱駝艦のフィルムで出会ったタイミングで、チラシを見て北方舞踏派の合宿に参加したのですね。北方舞踏派の合宿はどこでやったのですか？

鈴木：海猫屋ですね。

小菅：その頃はもう北方舞踏派は鶴岡から小樽に行っていましたから、鈴木さんは札幌から小樽に行って合宿に参加したということですよ。その時にはもうメンバーはほぼ揃っていたのですか？

鈴木：いえ、全然。三浦明美だけですね。

小菅：長谷川希誉子さんもまだ？

鈴木：全然ですね。佐々木智枝も。

小菅：熊谷日和さんはもう亡くなっていたのですよね。

鈴木：いえ。その時はいらっしゃいました。

小菅：何人くらいの合宿だったんですか？

鈴木：3人くらいですね。看護婦さんの方がいたんですよ。北方の人たちはその子狙いだっただけみたいなんですけど、どうでもいい私が残りました（笑）。思うに、あまり踊り心がなかったみたいで、ショーに行く前も最初練習するんですけど、なかなか踊りが踊りらしくできないみたいで真夜中3時頃まで稽古付けられましたね。

小菅：それはビショップさんが付けたんですか？

鈴木：いいえ。ジョルジュ高橋です。もう呆れてましたけどね（笑）。

小菅：それは何年くらいですか？

鈴木：1977年くらいですね。

小菅：結局その時の合宿で残ったのは鈴木さんだけだったのですか？

鈴木：そうですね。本命の看護婦さんが行っちゃったから（笑）。私もなんでだろう…。居心地が良かったんですかね。

小菅：仕事はどうしたんですか？

鈴木：その頃は夜の商売していたんですよ。そもそも中退してからカメラ屋さんとかに行き、ちょうど姉がすすきのでスナックを開いたりしていたんですよ。そこで手伝ったりして、その店を閉めた後も、やっぱり他の仕事に比べると時給がいいじゃないですか。その時給に釣られてそのままその世界で。当時そういうキャバレーだとかは、こう（下火に）なりかけたところだけど、まだ完全にはなっていない時代で、チップももらったりしたし。北方舞踏派に入ってからキャバレー回りとかしたけど、全

然違和感なかったですからね。元々そういうことしていたから。

小菅：小樽から舞踏に参加した時は、北方舞踏派が北海道に移ってすぐですよね。その頃の小樽の感じというのはどうでしたか？

鈴木：まだ運河が整備されていなくて、ちょっと汚い所もあったりして。でもゆっくり小樽の街を歩いたこともないですね。

小菅：ビショップさんが小樽に移った時は、最初の3カ月くらいはすごく話題になってどんどんお客さんも入るしテレビにも取り上げられるしと言っていましたけど。冬に入ったらバタッと人が来なくなって参ったとも言っていました(笑)。

鈴木：最初の頃は知らないですね。それにほとんど小樽に帰ることもなかったから、本当にキャバレーの旅回りをして、乗り物に乗ると寝るんですよ(笑)。それが中心だったような。トランクを階段の上からポンと蹴り落したこともあります。周りに人がいないのを確かめてから(笑)。

キャバレーでの経験

小菅：その頃のキャバレーというのは小さいキャバレーですか？

鈴木：大きい所はほとんどなかったですね。仙台にタイガーっていうすごく大きなキャバレーがあったんですよ。10人くらい他のプロダクションのお姉さんたちが本格的なダンス・ショーをやって、その頃私はまだ1年くらいで。ちゃんと踊りを習ってきている人たちだから上手いんですよ、ジャズダンスとか。他の子は脱がないんですけど、私は何もできないので私だけ胸出して、大きな扇持ってただ通過していくっていう(笑)。そんなのとかやっていましたね。その後タイガーも潰れちゃったのかな。

小菅：なるほど。キャバレー回りは振り付けられて踊りをするのですよね。その時の踊りのチームっていうのは、雪さんとか長谷川さんとか、いわゆる鈴蘭党のチームですか？

鈴木：キャバレーはほとんどソロでしたね。最後の方は女の子2人みたいなものもあったけれど、ほとんどがソロでした。

小菅：それはストリップもありましたか？

鈴木：胸までっていう感じですね、キャバレーの場合。

小菅：それで全国を回るわけですよね？

鈴木：1人で大きなトランク持って。でも、あれ鍛えられましたね、随分。楽屋で泣き叫んでいたこともありましたね。「もうイヤー」って（笑）。それで逃げちゃう子も結構いたんじゃないかな。キャバレー回りは好きじゃなかったですね。仕方なくやってたけど。

小菅：それはやっぱり人の前で肉体を晒すことに抵抗があったのですか？

鈴木：それは全然なかったです。裸になることは。ただ、私はクレームが付く女でしたんで、お客さんを殴っちゃったりするんですよ（笑）。

小菅：ああ、それがビショップさんが言う「尖ってた」ってことなのかな（笑）。

鈴木：酔っ払って触ってきたりするお客さんがいるんですよ。小さいフロアだと手を伸ばせば届くような所で踊っていたし、フロアが広がった所

でも酔っ払いだからベターって来たりするんだけど、そういう人たちをバコーンと殴って(笑)。相手も酔っ払ってるから「うへへへへ」なんて笑って済んじゃうんですけど、1人どこかで怒った客がいて、「殴るとはなんということだ」とプロダクションにまで電話して大騒ぎになったことがありましたね。

小菅：鈴木さんは悪くないですよ、触ってくる方が悪いですよ。

鈴木：でも殴ることはないですよ(笑)。

小菅：雪雄子さんや長谷川希誉子さんに聞くと、本当に九州から北海道まで、全国を回って踊りを見せるみたいですね。そのところは私などには、感覚的に分からないところがあります。

鈴木：踊っているという感覚より、乗り物に乗って移動しているというか。

舞踏を通してのカラダが変わる

小菅：北海道の小樽が拠点で、何か月に一遍かは帰ってくるわけですよね。キャバレー回りは1つの仕事として、舞踏の方はどういうふうに訓練されたのですか？ 帰ってきた時にビショップさんなり高橋さんなりが稽古を付けるわけですよね。鈴木さんはどんな公演に出ているのでしょうか？

鈴木：鈴蘭党から始まったから、『それで世界は終わらない』(1977)には出ていないんです。『魚の臭いのする王女』(1977)、『夏至の眼』(1979)、『どんこ姫』(1980)。『陽車』(1980)っていうのもあったかな。

小菅：『ホッケ考』(1978)とかは？

鈴木：『ホッケ考』も出ましたね。

小菅：あまり印象にないというか、覚えていないという感じですか？

鈴木：ああ、この頃記憶力がとんと悪くなって。

小菅：この写真集（『鈴蘭党写真集—舞い舞い Love：闇する白き舞姫たち』）で、鈴木さんは「舞踏志向」というタイトルで書いていらっしゃるみたいです。

鈴木：タイトルはビショップが付けたんだと思う。

小菅：そうですね（笑）。でも「踊りたい」という衝動はきっとあったのでしょうね。

鈴木：そうですね。でも体も変わりましたね。24歳以降くらいが絶好調でしたね。

小菅：それは舞踏をやって体が変わっていった。

鈴木：ええ。

小菅：どういうふうに変わりましたか？

鈴木：無駄な肉が削ぎ取られて、ある程度思うように動ける。心地良かったですね。今はもう贅肉だらけで（笑）。

小菅：いえいえ、そんなことはないと思います。ただ、舞踏っていう踊りは

他の例えばバレエや日本舞踊なんかみたいにいわゆるスタイルも教育法も完全に確立しているわけではなかったですね。難しくはありませんでしたか？あるいは、やりにくくはありませんでしたか？

鈴木：そもそも、そういうバレエだとかと縁がなかったから、いわゆるダンスっていうのはわからないわけで、舞踏しか知らないというか。

小菅：振り付けられて、それを踊るという。

鈴木：「振付」っていう言葉はあまり使わないかな。「振り」じゃないんですよね。手をこうやって、ということではなくて、結果こうなったっていうような作り方をするんですよ。だから形じゃないんですよね。「こういう形をしなさい」とか「ここで足を上げなさい」とか言うことは全然なくて、そうやっていたら結果足が上がったり、腰が砕けたりだとか、そういう感じですかね。

小菅：稽古の時はビショップさんなり高橋さんなりがある種のヒントを与えるわけですかね。「こういう気持ちで体を動かしてごらん」とかそういう稽古の仕方なのですか？

鈴木：そうですね。例えば「砂漠みたいな所で陽がカンカンと照り付けてカラカラ、喉もカラカラ、身もカラカラ」というような状況を設定されるというのかな。そしてそれを演じて、ダメ出しされたり、「いい、それそれ」と言われたり、そういう感じですね。

小菅：なるほど。それは楽しかったですか？

鈴木：性に合っていましたね。

小菅：高校中退の経緯を伺っても、鈴木さんは、性格的に人から「こう踊れ」と規制されるよりむしろ自由にやりたい、自由でありたいというのがベースにあったように推測します。

鈴木：自由でもないんですよ。自由だけど自由じゃないというか。自由にやっちゃだめなんですよ、たぶん。やっぱり、死に物狂いでそこまでいかないと。だから形じゃないんですよ。

小菅：ある時に、「うまくできたな」と思う時もあるわけですよ。あるいは、「自分でもできていないな」と思う時はあるのですか？

鈴木：必ずしもそれがビショップとかからOKが出るとは限らないですよ。思い込みで飲み込んで自分だけその気になっちゃってはいやっぱりだめなんですよ。やっぱり見せているんだから、見ている人がそういうふうに見られるようにしなきゃいけないですし、そういうのは意識しますよね。自分で酔っちゃうのは違うんだと思うんですよ。

小菅：その頃の鈴蘭党の雰囲気はどうでしたか？ 楽しかったですか？

鈴木：自分たちは鈴蘭党っていうのは商品名という形で受け止めていたの、北方舞踏派の一員であるという意識でした。鈴蘭党はあくまでも、雪雄子がリーダーのグループっていう感覚でしたね。実際、鈴蘭党で劇場回ったりしていましたね。

小菅：写真集を拝見するととっても仲の良い女性5人組という感じがしますけれども。

鈴木：仲悪くてギスギスしている雰囲気はなかったですよ。ほのぼのし

た雰囲気だったんじゃないかしら。私だけギスギスしていたかもしれませんか (笑)。

小菅：鈴木さんはギスギスしていたんですか (笑) ?

鈴木：ギスギスっていうかキリキリっていうか、怖がられていましたね。ピリピリキリキリしていて。若かったせいかなあ。

小菅：そうですね。他の舞踏家の公演は見ましたか？

鈴木：いやあ、踊り始める前に見たっさり見てないですね。

小菅：例えば土方巽の公演とか大野一雄先生の公演とかそういうものも？

鈴木：大野さんなんて全然舞踏と関係なくなってから見ましたし、当時は見てないですね。見る暇もなかったっていうか、年中ドサ回りしてましたから忙しかったですね。キャバレー回りか公演前に小樽帰って稽古するか、そういう生活でしたね。熊谷さんなんか結構いろんなことやってたみたいだけれど、私は寝てる方がいいわっていう感じで (笑)。空いてる時間もぐうたらしていましたから。

小菅：キャバレー回りっていうのは大変なんだろうなと思いますけれども、移動の時間が多いって仰っていましたよね。

鈴木：当時は大きいトランクで、今みたいにコロ (キャスター) が大きくないんですよ。小さいコロですぐ潰れちゃったりして、ズルズル引き摺りながら。でも辞めなかったですね。半泣きしながら行きましたもんね。

小菅：それはどうして続けられたんでしょう？

鈴木：ねえ。舞踏やりたかったからじゃないかな、やっぱり。

小菅：やっぱり舞踏とキャバレー回りはセットで考えていたのですね。舞踏をやるためにキャバレー回りをするし、舞踏をやるのだったらキャバレー回りをしなきゃいけないという。

鈴木：そうですね。

小菅：キャバレー回りをしたギャラというのは、ビショップさんたちが吸い上げていたのですか？

鈴木：まあ、そうですね（笑）。（長谷川）希誉子も言っていたけど、1日500円で、後はギャラを受け取ることはない。向こうに行っちゃって。だからチップ命ですね。まだ当時はチップくれていたりしていたから、チップ貰って大事にして（笑）。

小菅：チップというのはどのくらい貰えるものなのですか？

鈴木：その時々ですよ。それに、ちょっとこれ（下火）になりかけていたから。昔はお客さんに毛皮のコート買ってもらったとか、私たちより上の世代の踊り子さんなんかは言ってましたね。私の頃は全然貰えないところもあるし、ちょっと貰えるところもあるし。1回に一番多く貰えたのは3万くらいかな。あとは、1,000円とか折ってポーンと踊ってる所に投げてくれたり。

小菅：やっぱりそういう時は嬉しいんでしょうね？

鈴木：嬉しいですね (笑)。

人生の転機—火事

小菅：それでキャバレー回りをやりながら舞踏公演をされて、だいたい、それはいつ頃まで続くのですか？

鈴木：私は旅先で火事に遭ったんですよ。夜中の3時頃、寝入りばなに「火事だー！」って言って。劇場だったんですけどね。3人亡くなったんです。その時はジョルジュ高橋と一緒にいたんですけど、窓からジョルジュにポーンと放り出されて助かったんです。その時、ケムリを吸いながら真っ暗な中で「ああ、これで死ぬのかな」と思ったんですよ。27歳くらいだったか。「私の人生終わりか」とか思ったらポロポロポロポロ涙が出てきて、「子供作っとけばよかった」とか「子供も作らないで死ぬんだ」と。そこでポーンと放り出されて助かって、その思いがずっと強く残って、子供が欲しいというふうになっちゃって子供を作って。お腹が大きい時かな。当時すったもんだがあったんですよ。三行半を渡すようにしてビショップの所から出てきましたね。

小菅：その火事に遭われたのはどこですか？

鈴木：徳島だったような。

小菅：季節は？

鈴木：寒かったです。1月の7日くらいですかね。

小菅：その時はどなたと一緒に回っていたんですか？

鈴木：高橋さんですね。マジックで使う箱がガラス張りなんですけど、そこに私が押し込まれてクロスみたいのを掛けて、ハッと私が消えてるっていう。マジックを取り合わせたショーみたいな感じで。だから、そのショーの箱も燃えちゃったので、劇場側から賠償を貰ってましたね。

小菅：怖い思いをされましたね。

鈴木：ええ。怖かったですね。死ぬかと思ったから。

小菅：それで人生の転機になって。

鈴木：そうですね。

北方舞踏派から離れる

小菅：北方舞踏派で「すったもんだ」してというのは何があったのですか？

鈴木：詳しくは言いませんが、みんなあることに不満を抱いていて、それが爆発しちゃったんです。

小菅：前に雪雄子さんに話を伺った時に、もっともだなと思ったことがありました。それは女ばかり働かされて男は昼間から酒飲んでね。キャバレー文化は最初のうちは男も金粉ショーなんかをやったりして働きもするけれど、だんだん経済が下向きになってくるとキャバレー文化も、男の踊りよりもとにかく女性が出てきて裸を見せる方が求められるようになって、どうしても女性の方ばかりが働くようになって男は何もしてないじゃないのみたいな、そういう不満はあったわよって仰ってましたけど。

鈴木：へえー。私はそんな感じはなかったですね。

小菅：ともかくも、そこで鈴木さんは北方舞踏派から離れようとされたわけですね。そこを出られたのはだいたい30歳前ですね。

鈴木：そうですね。もうお腹に子供がいたんですね、その頃。

小菅：どなたと結婚したんですか？

鈴木：結婚はしてないです。子供が欲しかったものですから、子供だけ作りました。子供の頃から私は一生結婚しないだろうなと思っていたんですよ。その通りになりましたけど。ハタチくらいのまだ踊る前に結婚みたいなことをするようにしちゃったんですけど、失敗してだめになって、それ以来もう無駄な抵抗はやめようと思って（笑）。それで、火事の時に子供が欲しいと思って子供だけ作りました。

小菅：北方舞踏派を辞めて、お子さんを抱えて生活は大変だったんじゃないですか？

鈴木：実は生まれた子がまたなんということでしょう。生まれつきの病気で入退院を繰り返して、仕事どころじゃなくなって生活保護を受けていました。小さくて手術もできない状況だったんですけど、6ヶ月くらいの時に順天堂のゴッドハンドとか言われる小児外科の先生に手術してもらって治ったというか普通になりました。

小菅：その時は東京に出てきていたのですか？

鈴木：出てきたというか、ショー回りをしていたんですね。妊娠7ヶ月

くらいまでキャバレーとかショーを回っていて、昔は田無ですけど西東京市に住むようになったんですね。

小菅：お子さんも西東京市で生んで、順天堂で手術して、それからしばらくは生活保護で暮らされて、その時はもう舞蹈とは縁が切れたという感じですか？

鈴木：そうですね。舞蹈に未練がなかったかと言われるとあったんですけど、やっぱり目の前の子供を育てるのに必死になって、それなりに子育ても面白かったです。だからまた子供の手が離れてからやってもいいじゃないという気持ちもあったですね。

その後の舞蹈との関係

小菅：それから舞蹈へは戻られたのですか？

鈴木：金沢舞蹈館の合宿に行ったりしました。

小菅：山本萌さんの所ですか？ 萌さんと親しいのですか？

鈴木：親しいというか、萌さんのファンです（笑）。

小菅：そうですね！ 一昨年の夏、コロナの真っ最中でしたが、萌さんの所にインタビューに行って金沢舞蹈館で白榊ケイさんと一緒に話を伺いました。でも鈴木さんは萌さんとほとんど年は変わらないですね。

鈴木：そうですね。萌さんが1つか2つ上かもしれないですね。萌さんたちが東京に来てワークショップか何かをやっていて、それに行って、金沢にも行きましたね。萌さんファンです。

小菅：萌さんのどういう所に惹かれるのですか？

鈴木：萌さんの踊り，なんか「わかる～」みたいな（笑）。

小菅：萌さんは激しく動き回るというような踊りではないですよね。踊りとしてはしなやかだと思います。私は以前，森下隆さんと一緒に，「ポートフォリオ BUTOH」という研究グループで，萌さんが主演の『正面の衣裳』（1976）の作品映像と，萌さんが作っていた舞踏ノートをもとにして動きを再現するというプロジェクトをやったことがあるのです。その時に『正面の衣裳』をじっくり見て，萌さんの話も聞きましたけど，舞踏の1つのスタイルだなと思いました。鈴木さんが萌さんの合宿に時々行くようになったのはお子さんが少し大きくなられてからですか？

鈴木：いえいえ，もう息子が完全に大きくなって，50代じゃないかな。私より若い人ばかりで。

小菅：覚えておられるか分かりませんが，私は鈴木美紀子さんとは山梨県甲斐市のビショップさんの舞踏塾で偶然会っているのです。近くに座っていたのがご縁でした。鈴木さんは今では時々舞踏を見に行ったりしますか？

鈴木：最近はあまり。

小菅：ビショップさんの所に来られたのは長谷川さんと親しいからですか？

鈴木：「またやるよ」と手紙が来たので，じゃあ顔出そうかなと（笑）。

小菅：その時は鈴木さん、誰かとご一緒だったかなと思ったけれど…。

鈴木：ジョルジュじゃないかな。佐々木智枝ともどっか行ったな。

小菅：ジョルジュ高橋さんは北方舞踏派に加わっていたのですね。高橋さんはその後どうしたのですか？

鈴木：キャバレーとか劇場回りをして、普通の踊り子さんの振付とかもしてたんじゃないかな。今はタンゴを踊ってますけどね。

小菅：鈴木さんがお辞めになる前後に高橋さんも北方舞踏派を辞めたんですか？

鈴木：ほとんど同時期ですね。

小菅：だいたいその時が北方舞踏派の終わりの時期だったと思います。鈴木さんが、だいたい28、9歳の時ですか？

鈴木：27、8歳ですね。

小菅：高橋さんは北方舞踏派の名前の中に出てこないような感じがするけれど。

鈴木：でも、『なにもない人』（1981）は高橋さんのリサイタルだったんですけどね、たしか。器用貧乏みたいな人で何でもさっと軽くできちゃうんだけど、いわゆる土臭さとか粘りとか、そういうのがあんまりないんじゃないかな。

小菅：変な訊き方だけど、良い人ですか（笑）？

鈴木：良い人だと思いますよ。

小菅：今まで多くの舞踏家にいろいろなお話を伺って、やっぱり良い人が多いという印象です。笠井先生や大野先生はもちろんですが、ビショップ山田さん、森繁哉さん、山本萌さん、正朔さんもすごく良い人たちですよ。踊りのスタイルはもちろん違いますけど、その激しい革新的な芸術表現とは違って、生活態度としてはごく普通の常識人という感じがする。北方舞踏派や鈴蘭党の方々も波瀾万丈の人生を送り、ご苦労も多かったと思いますが、舞踏家というのは決してエキセントリックな人達ではないと思います。

現在の生活について

小菅：今、鈴木さんのお子さんは何をされているのですか？

鈴木：愛媛に行って、もう子供が3人います。孫を作ってくれて。ガラス作っているのかもしれないですね。みかん農家の養子に入ったんですよ。いろんなことやって大変幸せそうに（笑）。

小菅：では鈴木さんは今、一人暮らしですか？

鈴木：そうなんです。猫と（笑）。

小菅：我が家にもかつて猫が6匹いました。今では、2匹になりました。もう老猫ですが、猫はいつまでも赤ちゃんみたいなところがありますよね。猫との生活はそれでいいかもしれないですね。今、お仕事は？

鈴木：介護の仕事を長くやってたんですね。そしたら鬱病になっちゃって、ばあーっと泣き出したりして。介護するんじゃなくて介護される側みたいになっちゃって、それでできなくなって2年くらいまた生活保護のお世話になってポーっと暮らしていたんですけど、なんか何でもいいから労働しなきゃと思って、今は老人福祉施設の厨房で洗い物専門でお茶淹れたりしています。

小菅：それは大変でしょう。

鈴木：でも楽しいですね。いかに早く洗えるかとか（笑）。

小菅：若い20代の頃の舞踏人生、舞踏の体験を振り返ってみて、どんなふうに思いますか？

鈴木：萌さんとか白柳ケイさんとか、今もずっと続けていらっしゃる方を尊敬というか…、羨ましいも変だな…、なんだろう。私にはそれだけの情熱がないですね（笑）。元々、デレツとしているから、自らやるっていうことはできないですね。

小菅：北方舞踏派のチラシを見て、偶然みたいにして舞踏に入って行って20代をキャバレー回りと舞踏の公演でもって青春を過ごされた。

鈴木：そうですね。もう40年も前の話ですのでね。

小菅：また舞踏をやろうという気持ちはありませんか？

鈴木：何かに便乗して。でも体を作らなきゃいけないから（笑）、大変だと思います。

小菅：長谷川希誉子さんも、ご体調が悪くて随分体が動かない時代があって、だけどそれが回復して今また新たにステージネームを田中基先生から貰って、「緒環毘沙」としてビショップさんとやり始めました。そういう戻り方もあるのだと思います。

コロナ時代を生きる

小菅：今こういう時代でコロナウイルス感染症が流行っています。鈴木さんはコロナの時代は大変ですか？ 気持ち的にも体も。

鈴木：職場も徒歩で行けるんです。それで洗い場で洗って、施設だから敏感でPCR検査も毎週やって、ワクチンもちろん。こないだもう3回目のワクチン受けて。だからなんとなく安心してられるし、それほど不便とか不都合とか思わないですね。

小菅：お話を伺って、この写真集をよく見て、楽しそうだなとも思うし、大変そうだなとも思いました。いろんな所を回って、時代も激しいというか日本が上り調子から下降するところで、社会的にもいろんなものが整備されていないし、もちろん女性の扱いもモノみたいに、あるいは性の対象みたいに扱われたような時代だと思いますし、そういう意味でこの時代に女性で舞踏をやっている人たちというのは、非常に厳しい経験をしたのだらうなと思いますね。今でもそうかもしれないですけど。

鈴木：でも楽しかったですね。

小菅：そうですね。1つの時代の話をして、現実感をもって伺ったような気がします。しかし、ある時期、北方舞踏派に加わってキャバレー回りをするようになって親御さんは心配されませんでしたか？

鈴木：むしろ喜んでたんじゃないかな（笑）。その前に水商売に走っちゃって、この子は一体どうなるんだと。家も飛び出して一人暮らししてたので。公演も見に来たりして、安心してましたね、むしろ。ビショップも私の両親が来た時に歓迎してくれて。

小菅：長谷川希誉子さんが「チップをたくさん貰ったからお母ちゃんあげるわ」みたいな最後はそういう関係になったと仰っていたから、きっと親御さんもいろんな思いはあったと思いますが、最後は収まるところに収まったという思いなのでしょうね。もう親御さんは亡くられていますか？

鈴木：父は亡くなりました。母はまだ健在です。

小菅：そうですか。北海道におられるんですか？

鈴木：ええ。姉と一緒に。

小菅：一番上の、すすきのにいたお姉さん？

鈴木：そうなんです。

小菅：そうですか。70年代、80年代の雰囲気がすごくよくわかったような気がします。今日はどうもありがとうございました。

【付記】このインタビューは、2022年1月19日水曜日午後1時30分より、慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎会議室において行われた。当日、鈴木美紀子、小菅隼人の他に、記録助手として熊谷知子（明治大学兼任講師）が同席した。本稿は、熊谷が起こした原稿をもとに小菅が加筆・修正・編集・確認作業を行い、さらに、鈴木美紀子の確認、訂正、加筆を経て出版

するものである。この日は、コロナウイルス感染症第六波の急拡大が叫ばれ、東京都では前週同曜日の約3倍となる7377人の過去最多感染者数を記録している。小菅、熊谷は二回のワクチン接種、鈴木は三回のワクチン接種を終え、さらに、鈴木はエッセンシャルワーカーであるため、毎週、PCR検査を受けている。また、当日は、換気、距離、マスク、消毒、検温等、感染症対策について十分な検討と注意をおこなった。

本企画の遂行にあたって、令和三年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）「暗黒舞踏を芸術的カテゴリーとして確立するための実証的研究」（代表：小菅隼人）の助成を受けた。